

平成27年度 第2回学校評議員会報告

I 開催日時 平成28年1月18日（月）9：30～11：25

II 内容

1 開会（9：30）

2 校長挨拶

3 報告

（1）平成27年度学校経営の総括について（校長）

（2）平成27年度各学部経営の総括及び進路希望状況について（各学部主事）

（3）平成27年度学校評価集計結果について（副校長）

○ 質疑応答

< B 様 >

センター的機能の相談内容の傾向はどのようになっているか？

< 校長 >

必要な子どもへの支援方法や手立ての工夫など、具体的内容が多い。平成26年度は年度末総計で320件であった。今年度は9月末まで（6ヶ月間）で186件となっている。

相談支援の依頼にはすべて対応しているが、高等学校からの支援要請は余り多くなく、直接的な支援に繋がらない現状も多い。

< C 様 >

校長より支援を継続してきた子どもが地元の普通校に進む現状があるとの話があったが、高等部も同様か？

< 校長 >

宮古圏域の支援に必要な中学生の人数を根拠として、次年度は高等部1年生を2学級編制と決めたが、宮古圏域の高等学校や、内陸部の支援学校や私立高等学校を選ぶなどの状況にある。

高等学校がそうした生徒を合格させた場合、入学時から支援学校に相談していたければ、学校生活や進路選択の支援もしていけるので、生徒にとってプラスになると考えている。

4 提 言

<A 様>

評価アンケート結果から、学校の教職員のコンプライアンスの取組や情報共有の自己評価が高く、そのことが保護者からの信頼・評価に繋がっていると感じる。一方、多忙感が解消できないという現実には、メンタルヘルスの観点からも、対処が必要である。特に特別支援学校の教員は、児童生徒や保護者を支える仕事をしているのであるから、メンタルヘルス等も含めて、職員自身も必要な支えを受けながら、仕事に従事して欲しい。ぜひ次年度は力を入れて、対応・対策を考えていただきたい。

<B 様>

学校評価アンケート結果から、「子どもの成長を感じる」「入学させて良かった」の項目がきわめて高く、プラス評価が100%というのが素晴らしい。中学校との交流については、小学校時代からの経験の積み重ねもあり、ぜひ継続していただきたい。相手校の中学校に対して「もっとこういう所にも気づいて欲しい」ということなど、事前の打ち合わせでは気づかなかったことでも、反省の中で遠慮なく伝えていただきたい。また、復興教育とトラウマの関係は、中学校でも難しさを感じているところである。「少しずつ」でも実践を続けることが、乗り越えることに繋がるのだと信じるしかない。

<C 様>

就学前から保護者と何度も相談を重ね、保護者と共に悩み抜いた結果として宮古恵風支援学校入学を決断している。だから、「入学させて良かった」と学校評価アンケート結果にあったことが非常に嬉しい。一緒に悩んだ甲斐があったと感じる。昨今は医療面の発達により、以前なら超未熟児である500g程度の胎児でも生まれてくる中、これまでのような定型的発達ではない、多様な育ちをもつ幼児児童に対応しなければならない。そのような幼児が宮古圏域にもいる中で、宮古市内であれば、宮古恵風支援学校を含めた選択肢がある一方、川井など離れている場所に住居があると、どうしても地元の学校に留まらざるを得ない場合もある。可能な限り児童生徒に合った学びの場を提供していただければ、と切に願う。

<D 様>

近年、さまざまな法的な整備が充実してきている。「虐待防止法」「障害者基本法改

正」「障害者総合支援法」などがそうであるが、中でも一番大きかったのが、障害者権利条約の批准、すなわち合理的配慮の部分であろう。福祉施設として、また学校として配慮すべき事柄について、本人・保護者・学校により発達の段階を考慮しつつ、合意形成を図った上で決定し、また、学校教育の現場についてもこの権利条約の観点から見直す作業も必要と思う。

< E 様 >

学校評価アンケート結果の内、交流学习への評価について。自分の子どもも交流学习を实践したが、授業として学校を訪問する時のみならず、交流先の学校からのお便りや子ども会活動での交流など、平素からも繋がっていることを感じている。必要があればそのような部分も含めて交流学习の成果について伝えていきたいと感じた。また、PTA活動について低い評価となっていることについては、常日頃から感じているところである。PTA活動に対する、更なる意識啓発が必要と感じる。学校に対して非常に評価が高いのに、保護者としての活動がこれではいけないという思いである。

5 閉 会 (1 1 : 2 5)